新版（しんぱん）　指導要文集（しどうようもんしゅう）

第一章（だいいっしょう）　信心（しんじん）の基本（きほん）

勤行（ごんぎょう）・唱題（しょうだい）

故に、妙法蓮華経の五字を唱うる功徳莫大なり。「諸仏・諸経の題目は法華経の所開なり。妙法は能開なり」として、法華経の題目を唱うべし。

（001唱法華題目抄

勤行・唱題19ページ－2行）

一念無明の迷心は磨かざる鏡なり。これを磨かば、必ず法性真如の明鏡と成るべし。

深く信心を発して、日夜朝暮にまた懈らず磨くべし。いかようにしてか磨くべき。ただ南無妙法蓮華経と唱えたてまつるを、これをみがくとはいうなり。

（015一生成仏抄

勤行・唱題317ページ－14行）

迷い悩む生命は磨かない鏡のようなものです。これを磨くならば、くもりのない鏡のように、かならず真実の悟りの智慧の鏡へ

と変わるのです。深く信心をふるいおこして、昼も夜も朝も暁も、つねに油断しないで自分の生命を磨かなければなりません。どのようにして磨けばよいかといえば、（御本尊に）真剣に南無妙法蓮華経を唱え、信心にはげむことが生命を磨くことになるのです。

この十如是(じゅうにょぜ)、三転(さんてん)によまるること、三身即一身(さんじんそくいっしん)・読
一身即三身(いっしんそくさんじん)の義(ぎ)なり。三(みっ)つに分(わ)かるれども一(ひと)つなり。一(ひと)つ
に定(さだ)まれども三(みっ)つなり。

（020 一念三千法門(いちねんさんぜんほうもん)
勤行(ごんぎょう)・唱題(しょうだい) 364ページ－11行）

されば、させる解(さと)りなくとも、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(とな)うるならば、悪道(あくどう)をまぬかるべし。

（033 法華経題目抄(ほけきょうだいもくしょう)（妙(みょう)の三義(さんぎ)の事(こと)）

勤行(ごんぎょう)・唱題(しょうだい)533ページ－5行）

琥珀(こはく)は塵(ちり)をとり、磁石(じしゃく)は鉄(くろがね)をすう。我(われ)らが悪業(あくごう)は塵(ちり)と鉄(くろがね)とのごとく、法華経(ほけきょう)の題目(だいもく)は琥珀(こはく)と磁石(じしゃく)とのごとし。かくおもい(思)て、常(つね)に南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(とな)えさせ給(たも)うべし。

（033 法華経題目抄(ほけきょうだいもくしょう)（妙(みょう)の三義(さんぎ)の事(こと)）

勤行(ごんぎょう)・唱題(しょうだい)533ページ-12行）

題目ばかりを唱うる福、計るべからずとみえぬ。一部八巻二十八品を受持・読誦し、随喜・護持等するは広なり。方便品・寿量品等を受持し、乃至護持するは略なり。ただ一四句偈、乃至題目ばかりを唱え、となうる者を護持するは要なり。広・略・要の中には題目は要の内なり。

（033 法華経題目抄（妙の三義の事）

勤行・唱題 534ページ-15行）

題目ばかりを唱える人の福徳ははかることができないほどすばらしいものであると説かれています。（さて法華経修行の仕方を分けて

みますと）法華経一部八巻二十八品のすべてを受持、読誦し、随喜、護持するのは広略要のうちの広の修行です。法華経のなかの要である方便品・寿量品等を受持し、護持するのは、略の修行です。ただ一四句偈（四句をもって一つの偈をなす短い経文）ないし五字七字の題目だけを唱え、また唱える者を護持するのは要の修行です。広略要のなかでは、五字七字の題目は要中の要なのです。

「経」とは一切衆生の言語音声を経と云うなり。釈に云わく「声、仏事をなす。これを名づけて経となす」。

（095 御義口伝

勤行・唱題984ページ-17行）

経というのはあらゆる生命体が発する言葉、音声のことです。章安大師の「私記縁起」（「法華玄義」の序）には「仏の音声はすべて衆生を教化する所作である。これを名づけて経という」とあります。

「合掌」とは、法華経の異名なり。「向仏」とは、法華経に値い奉るを云うなり。「合掌」は色法なり、「向仏」は心法なり。色心の二法を妙法と開悟するを、「歓喜踊躍」と説くなり。

（095 御義口伝

勤行・唱題 1006ページ－16行）

「合掌」とは法華経の異名です。「向仏」とは、南無妙法蓮華経におあいしていくということです。合掌は色法にあらわれた姿であり、向仏とは信心の心法です。色心の二法

（生命）を妙法蓮華経であると悟ることを、法華経譬喩品で舎利弗が歓喜踊躍したと説くのであり、歓喜踊躍とは心法一体の姿なのです。

せいめい　みょうほうれんげきょう　さと　ほけきょうひゆほん　しゃりほつ　かんきゆやく　と　かんきゆやく　しんぽういったい　すがた

「廻転（えてん）」とは、題目（だいもく）の五字（ごじ）なり。

（095 御義口伝（おんぎくでん）

勤行（ごんぎょう）・唱題（しょうだい）

1009ページ－7行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、「与如来共宿」の者なり。傅大士の釈に云わく「朝々仏とともに起き、夕々仏とともに臥す。時々に成道し、時々に顕本す」云々。

（095 御義口伝

勤行・唱題 1027ページー12行）

いま日蓮とその門下が南無妙法蓮華経を唱えるのは、法華経法師品に説かれる「如来と共に宿する」人のことです。弥勒菩薩の後身といわれる傅大士は「毎朝仏とともに起き、毎晩仏とと

に安らかに寝(やすね)ます。また瞬間瞬間(しゅんかんしゅんかん)に成道(じょうどう)し瞬間瞬間(しゅんかんしゅんかん)に顕本(けんぽん)するのです(の)」と述べています。

今(いま)、日蓮等(にちれんとう)の類(たぐ)い、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(とな)え奉(たてまつ)るは、
「大音声(だいおんじょう)」なり。
（095御義口伝(おんぎくでん)
勤行(ごんぎょう)・唱題(しょうだい)1032ページー2行）

今(いま)、日蓮等(にちれんとう)の類(たぐ)い、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(とな)え奉(たてまつ)るは、仏(ほとけ)に宝華(ほうけ)を奉(たてまつ)るなり。

（095 御義口伝(おんぎくでん)

勤行(ごんぎょう)・唱題(しょうだい)1033ページ-9行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、大風の吹くがごとくなり。

（095御義口伝

勤行・唱題1034ページー17行）

いま日蓮とその門下が、南無妙法蓮華経と唱えていく姿というものは、大風の吹くようなものです。

法華の題目は獅子の吼うるがごとく、余経は余獣の音のごとくなり。「諸経中王（諸経の中の王なり）」の故に「王」と云うなり。

（095 御義口伝

勤行・唱題 1064ページ－16行）

法華経の題目は百獣の王・師子が吼えるようなものであり、法華経以外のあらゆる経は他の獣の声のようなものです。法華経は諸経の中の王であるので王というのです。

礼拝(らいはい)する時(とき)、両(りょう)の手(て)を合(がっ)するは、煩悩即菩提(ぼんのうそくぼだい)・生死即(しょうじそく)涅槃(ねはん)なり。上慢(じょうまん)の四衆(ししゅ)の具(そな)うるところの仏性(ぶっしょう)も、不軽(ふきょう)の具(そな)うるところの仏性(ぶっしょう)も、一種(いっしゅ)の妙法(みょうほう)なりと礼拝(らいはい)するなり

（095 御義口伝(おんぎくでん)

勤行(ごんぎょう)・唱題(しょうだい)1069ページ-13行）

不軽菩薩の四衆を礼拝すれば、上慢の四衆の具うるところの仏性もまた不軽菩薩を礼拝するなり。鏡に向かって礼拝をなす時、浮かべる影また我を礼拝するなり

（095 御義口伝

勤行・唱題 1071ページ-11行）

「妙音」とは、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉ることは、末法当今の不思議の音声なり。

（095 御義口伝

勤行・唱題 1077ページー11行）

日蓮とその門下が唱える南無妙法蓮華経の音声は、末法今時における不思議の音声、つまり真実の妙音なのです。

今、日蓮等の弘通の南無妙法蓮華経は、体なり、心なり。二十八品は用なり。二十八品は助行なり、題目は正行なり。正行に助行を摂むべきなり云々。

（095 御義口伝

勤行・唱題 1106ページー8行）

いま、日蓮とその門下が弘めている南無妙法蓮華経は、久遠元初の自受用身が弘めるところの本体であり、心すなわち根本となるものです。釈尊が説いた妙法蓮華経二十八品は、用すなわち作用面であり、南無妙法蓮華経の説明書です。仏道修行のう

えにおいても、二十八品（にじゅうはっぽん）は助行（じょぎょう）であり、題目（だいもく）が正行（しょうぎょう）です。

助行（じょぎょう）は正行（しょうぎょう）に含（ふく）めるべきなのです。

題目の五字は、体のごとく、音のごとくなり。題目を唱え奉る音は、十方世界にとずかずという処なし。我らが小音なれども、題目の大音に入れて唱え奉るあいだ、一大三千界にいたらざる処なし。譬えば、小音なれども貝に入れて吹く時、遠く響くがごとく、手の音はわずかなれども鼓を打つに遠く響くがごとし。

（096 御講聞書

勤行・唱題 1121ページ－11行）

末法に入って、今、日蓮が唱うるところの題目は、前代に異なり、自行・化他に亘って南無妙法蓮華経なり。

（160三大秘法稟承事（三大秘法抄）

勤行・唱題1387ページー4行）

末法に入って、いま日蓮が唱えているところの題目は、正法、像法時代の題目とは異なり、自行と化他にわたる南無妙法蓮華経なのです。

今(いま)、法華経寿量品(ほけきょうじゅりょうほん)を持(たも)つ人(ひと)は、諸仏(しょぶつ)の命(いのち)を続(つ)ぐ人(ひと)なり。

（164 法蓮抄(ほうれんしょう)

勤行(ごんぎょう)・唱題(しょうだい)1426ページ-1行）

白馬は日蓮なり。白鳥は我らが一門なり。白馬のなくは我らが南無妙法蓮華経のこえなり。この声をきかせ給う梵天・帝釈・日月・四天等、いかでか色をましひかりをさかんになし給わざるべき、いかでか我らを守護し給わざるべきと、つよづよとおぼしめすべし。

（167曽谷殿御返事（輪陀王の事）

勤行・唱題1447ページー3行）

白馬は日蓮です。白鳥は私の弟子、門下です。白馬が鳴くというのは、私たちが唱える南無妙法蓮華経の音声です。この声を

聞く梵天・帝釈・日・月・四天等の諸天善神は、輪陀王が白馬のいななきを聞いて生命力を増していったようにどうして力を増し光を盛んにしないということがありましょうか。どうして私たちを守護しないことがありましょうか、と心強く思っていきなさい。

き　ぼんてん　たいしゃく　にち　がつ　してんとう　しょてんぜんじん　りんだおう　はくば　き　せいめいりょく　ま　ちから　ま　ひかり　さか　わたし　しゅご　こころづよ　おも

苦をば苦とさとり、楽をば楽とひらき、苦楽ともに思い合わせて南無妙法蓮華経とうちとなえいさせ給え。これあに自受法楽にあらずや。

（203 四条金吾殿御返事（衆生所遊楽御書）
勤行・唱題 1554ページ－12行）

苦しいときには苦しいと悟り、楽しいときは楽しいなと喜び、苦しいときも楽しいときも南無妙法蓮華経と唱えきっていきなさい。それが自受法楽（仏の境地）ということではないでしょうか。

ただし御不審のこと、法華経はいずれの品も先に申しつるように愚かならねども、殊に二十八品の中に勝れてめでたきは方便品と寿量品にて侍り、余品は皆枝葉にて候なり。されば、常の御所作には、方便品の長行と寿量品の長行とを習い読ませ給い候え。また別に書き出だしてもあそばし候べく候。余の二十六品は、身に影の随い、玉に財の備わるがごとし。寿量品・方便品をよみ候えば、自然に余品はよみ候わねども備わり候なり。

（234月水御書（がっすいごしょ）

勤行（ごんぎょう）・唱題（しょうだい）1646ページ－3行）

「国に謗法の声有るによって万民数を減じ、家に讃教の勤めあれば七難必ず退散せん」

（283 南部六郎殿御書

勤行・唱題

1807ページ－11行）

聖人の唱えさせ給う題目の功徳と、我らが唱え申す題目の功徳と、いか程の多少候べきや」と云々。さらに勝劣あるべからず候

374 松野殿御返事（十四誹謗の事）

勤行・唱題 1987ページー8行）

聖人が唱えられる題目の功徳と、私たちが唱える題目の功徳とでは、どれほどの違いがあるのでしょうか、とのご質問ですが、題目の功徳には、まったく勝劣はありません。

仏に成り候ことは別の様は候わず。南無妙法蓮華経と他事なく唱え申して候えば、天然と三十二相八十種好を備うるなり。「我がごとく等しくして異なることなし」と申して、釈尊程の仏にやすやすと成り候なり。

（400 新池御書

勤行・唱題 2068ページ－1行）

仏になるということは特別なことではありません。ただ南無妙法蓮華経とほかのことをさしおいてひたすら唱えていくならば、自然に生命に仏の相である三十二相八十種好をそなえてい

けるのです。法華経方便品第二に「我が如く等しくして異なること無からしめん」とあるように、釈尊のような仏にやすやすとなっていけるのです。

法華経一部の肝心は南無妙法蓮華経の題目にて候。朝夕御唱え候わば、正しく法華経一部を真読にあそばすにて候。二返唱うるは二部、乃至百返は百部、千返は千部、かように不退に御唱え候わば、不退に法華経を読む人にて候べく候。

407 妙法尼御前御返事（一句肝心の事）

勤行・唱題 2099ページ－8行）

法華経一部八巻二十八品の根本は、南無妙法蓮華経の題目です。朝夕題目を唱えるならば、まさに法華経二十八品のすべてを

本当の意味で読まれてことになるのです。題目を二遍唱えれば、法華経二十八品を二回読んだことになり、百遍であれば百回、千遍であれば千回読んだことになります。このようにして、退転せずに題目を唱えていくならば、不退転に法華経を読む人になるのです。